



イースター、おめでとうございます。今年のイースターは例年に比べ早く3月31日であった。これは、ユダヤの暦の「過越祭」の時なので、北半球では春に当たる。我が団地では、「ウメ」が終わり、「コブシ」が咲き、「モクレン」が続き、「サクラ」がようやく咲き始めた。私の「窓辺から」見える15~16本の大木の桜はおくてで、まだ蕾のままである。満開になると、サクラ酔いするくらい艶やかである。

イスラエルの「過越祭」の時期は日差しが強くなり急に暑くなるようだ。過越祭に、主イエスは十字架上で死に、三日目に復活された。復活という言葉は嬉しい希望の響きがある。しかし、十字架の死から復活されたと聞いて、誰もが「ナニ」と疑問を持つであろう。私も、主イエスが肉体を持って復活したとは信じていない。四つの福音書は、それぞれの個性をもって、主イエスの復活を描いている。興味深いのは、イエスの復活を、裁判で証言能力を認められていない女性が初めて証言して以降、証言が始まった。

聖書において、パウロが自らの言葉で復活を証言している。紀元50年代に記した、コリントIの15章で長文の復活信仰を告白している。「最も大切なこととして私があなたがたに伝えたのは、私も受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおり私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファ（ペトロ）に現れ、それから十二人に現れたことです。…そして最後に、月足らずで生まれたような私にまで現れました（15:3~4、8）」と、聖書の預言通り、主イエスは死んで葬られたが、復活し、12使徒に現れ、自分にも現れたと、復活のキリストに出会ったと書いている。その出会いについては、使徒言行録に三度も書かれている。パウロが宣教において繰り返し語ったことを、使徒言行録の著者ルカが書いたものであろうが、パウロが、人生を変える、復活のキリストと出会った特異な、決定的な宗教体験をしたことは確かではないか。その復活の体は、朽ちる自然の体ではなく、栄光の霊の体であると述べている。霊の体とは、肉眼によらず、霊的に、即ち、信仰的に信じ、受け入れることである。この復活信仰が律法から解放され、キリストにある自由とキリストに倣う愛を生きるパウロに変えたのである。ペトロIの1章8節~9節の「あなたがたはキリストを見たことがないのに愛しており、今見てはいないのに信じており、言葉に尽くせないすばらしい喜びに溢れています。それは、あなたがたが信仰の目標である魂の救いを得ているからです」の御言葉が、私の生きることへの意欲と希望を与えられた復活信仰である。この春に復活を祝う喜びを与えられている。